

Title	倫敦時代のKarl Marx
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.1 (1918.) ,p.129- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180100-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Ketteler 僧正叫んで曰く「大慈悲なる神よ、願くは直に生産組合の組織が労働階級の幸福の爲めに繁榮を來す可き基督教の土に、其の實り多き思想の種子を播く可き人々を憤起せしめよ」と(同書百四十四―五頁)。

六

Lassalle に由りて喚起せられたる激動が鎮静したる後に於ても労働階級の境遇を改善するが爲めに進んで協力せんとする Ketteler の希望は決して減ずることなかりき。一千八百六十九年七月二十五日、彼れは Liebefrauen に於ける労働者の集會に臨みて演べて曰く「労働者をして宛然一個の單純なる生産力、一器械の如くに、そが彼れを破壊するまで使用し盡す資本の罪は自ら壊滅せしめられざる可らず。是實に其の衰壞せしめたる労働階級に對する犯罪なり」と。而して彼れは恰も Lassalle 其の人に等しき氣勢を以て吾が現代の産業組織に生起しつゝある資本

の暴虐を痛罵せり。

遮莫時の經過も失意挫折も彼れが庶民に對する強烈なる愛情と現在の不正及市民の支配に從屬するの程度とを滅殺し得可き將來に對する其の信仰とを薄弱ならしむること能はざりしと雖も、彼れが其の著 Die Arbeiterfrage und das Christenthum. を出版したる一千八百六十四年の交に於て有したる希望は次第々々に消滅するに至れり。彼れの抱懷せる加特力夜の樂觀主義、信徒の慈善心に對する其の信仰は日々の失意に壓迫せられて漸次消滅す可き運命を有したり。縱令彼れは仍ほ社會問題に關して論述するを息めず、而して永く之に興味を有したりと雖も、彼れは決して再び其の當初の計畫を主張することなかりき。而して後年國家的干渉に依頼し、政府の銳意なる行動及び財政上の援助に依るの外他に救世の有効なる方策を認めざる眞の加特力教社會黨の組織せられたる時、當然自己の利

益、否、自己の特權をも擁護するの必要に驅らるゝが爲めに、自ら保守の態度を棄つる能はざる治者階級の個人的發意に過度の信仰を置くよりも労働問題の解釋上更に危険なるもの存在し得ざる可しとの確信は晩年に及んで漸く彼れを捕ふるに至りしものなる可きか。

(十二月十一日夜譯纂)

(附記) 本篇中に關説せる Lassalle, Hatfield 夫人及び Helene von Dönnings の關係に就きては曾て本誌上に連載せられたる小泉教授の「フェルナナンド・ラッサルと獨逸労働者」に詳かなり。

倫敦時代の Karl Marx

阿部秀助

以下の論文は現時獨逸言論界の雄將である Maximilian Harden の Die Zukunft Jahrgang, XIX. Nr. 3. 所載の露國の經濟學者 Maxim Kovalevsky の Erläuterungen an Karl Marx を譯出したもので譯文中「自分」とあるは Marx の場合を除いては Kovalevsky のことである。

所謂「萬國労働者聯合」の初度の總會が Genf で催されたのは千八百六十六年九月三日のことである。當時 Marx は資本論第一卷に其全力を傾倒してゐた結果、倫敦を去ることが困難で彼れは當時書を同志 Kugelmann に與えて「自分が今着手中である著述の労働者階級に與ふる効果は、自分が Genf の會合でなす、總ての演説よりも遙かに大なるものである」との意を洩らしたの

である。

然し、一面から觀察して Marx が此會合に出席しなかつたことは、反對派の乗する處となつて、現に佛、伊兩國の代表者中には婦人及未成年者勞働問題に對して獨逸方面の一派と相容れず、即ち後者が此問題に賛意を表してゐるのに對して、前者は家内工業以外に之れが加入を悦ばず、斯くて次回の會合には兩派の軋轢は益々甚しくなつて、遂に國家及之れが權力の存在を公然否定する徒輩の中には相率ひて Bakunin の周圍に集まり Tagos 會合の際には彼等は熾んに Marx を攻撃したが、然し同會議は別に之れが爲めに議事を變ずることなく、終に左の決議即ち「勞働者の自由を求むる我等の戰は我等をして、一箇の政黨として合同し、斯くて以前の黨派から區別せらるゝことが必要である。今迄吾人は全勢力を經濟戰に集中したが、吾人は同時に農業家及資本家の政治的勢力に對して吾人

の勢力を集中することが必要である。」と斯くて兩派の衝突は Bakunin の一派が萬國勞働者聯合會から分離することによつて終りを告ぐるに至つたのである。而して Marx が直接間接勞働者運動から其身を遠ざくるに至つたのも、此際のことである、但、彼等は獨逸に於ける無產者階級の指導者即ち Lassalle, Bebel, Liebknecht とは依然として其關係を繼續してゐたと共に、一面政治上、或は個人的方面の反對者に對しては熾んに論駁を試みたのである又、Nikolas Uhn が彼れに供給した材料を利用して、彼等は Engels と共に南歐方面に於ける少壯の無政府主義者に對抗して堂々たる論陣を張つたのである、當時 Bakunin の黨派には二三の有力者、例者 Elisee Reclus, Guillaume, Peter Krapotkin の如き人々が加入してゐたのであるが、然し、此派の影響は主として伊太利及西班牙兩國方面に於ける少壯氣鋭の革命主義者間のみに限られ、加ふるに

彼等の勞働者運動に對する態度は餘りに理想的方面に偏してゐた結果、Marx は之れを攻撃すると共に其友 Engels をして有名な單行本 *Der Dürings Umwälzung der Wissenschaft* をなさしめたので、此點は明かに彼れの煽動の結果である自分が Marx を目のあたり知つたのは以上 Bakunin の一派及 Düring に對して彼及 Engels が熾んに論駁せし際のことである、彼等は初度の會見に於て自分に贈るに二部の單行本を以てしたのである、そも此會見は彼れの女婿である Longe の賜で、當時自分と Marx との間に話に上つたのは彼れの舊友の態度や、露語で彼れの資本論第一卷を公刊することであつた。

倫敦で送つた最初の冬には、自分は Marx と遭ふ機會は極めて少かつた、當時彼れの住宅は Regent Park を去る遠からざる Square Crescent にあつた、自分は今でも其屋敷の番號が四十一番であつたのを記憶する、而して其住宅の第一

階は彼れの書庫と客間で、彼は此客間に訪問客を迎ふるのを常としたのである、彼れの長女と次女とは當時既に他に嫁してゐた、即ち長は Longe に、次は當時著述家として知られてゐた Paul Lafargue の夫人となつてゐたのである、只だ三女 Eleonore は Irving の沙翁劇を愛する餘り自から梨園の人たらんことを志してゐたのである。

自分が殊に Marx に接近するの機會を得たのは Karlsruhe 滞在の際である、當時自分等二人は殆んど毎日彼方の山此方の丘を散策するのが常で、此時から Marx が自分によこす書信には *geehrten Freunde* の字が多くなつたのである彼れは當時、資本論第二卷に着手してゐた結果殊に彼れが知らんと欲した點は露西亞の如き米國の如き比較の後進國の地位にある國家の資本集積の狀態であつた、彼れは此目的を達する爲めに紐育や莫斯科方面から澤山參考書を取寄せ

たのである、彼れは多數の國語に通じてゐて、單に獨、英、佛の語を流暢に話したばかりでなく、同時に露、伊、西、「ルーマニア」の國語にも通曉してゐたのである、斯くて彼れは多くを讀んだ現に自分の手許から齎した書にも、西班牙の土地所有權發達史や Morgan の著述として有名な「古代の社會」等がある、而して後者は自分が米國に於ける初度の渡航の際に齎したもので、想ふに以上の書籍が Engels の單行本 Der Ursprung der Familie, Privateigen thums, und des States に材料を供給したことは蓋、大であつたと思ふ。

Marx の知遇を得た人は、日曜日の夕、彼れと共に Engels の許によく招待せられたものである、後者は Manchester の工場主で、かなりの資産を有してゐた結果、いつも客を招く際には必ず Marx の家族を宴席に列せしめたものである、但、Marx 自身は友を撰擇するに非常に嚴

重で其結果當時歐洲の文士として有名であつた Lavetve の如きは、彼れに近かんとして遂に之れを果し得なかつたのである、只だ Marx が友として交際した人物には一二の實證主義者があつた。其中殊に懇意であつたのは當時民主主義の新聞 Beehive に關係してゐた Beccet 教授であつた、自分は當時 Marx の名が普ねく英國の讀書界に知れわたつてゐたと認むることは出来ぬ、何んとなれば、彼の資本論は尙ほ英譯せられず、彼の智的感化は單に二箇の國即ち獨逸と露西亞とに殆んど限られてゐたのである、彼れの資本論第一卷が世に公にせられた際に、後ちに露都の大學教授となつた Kaufmann は Euro-paishen Boten の誌上で同情と該博な識見とに富んだ批評を試みたと共に、同時に露西亞の經濟學者 David Ricardo und Karl Marx の著者である Sieber も亦た資本論に就いて其所見を吐露したのである而して露西亞で公にせられた資

本論の批評中で Marx が最も興味を感じたのは Kaufmann の論文であつた、爾來、彼れが露國の經濟及文學に關した著書に注意を拂つてゐるとは彼れが Tschuprow の鐵道政策を其著に引用した點から見ても、又だ Karejew の十八世紀に於ける佛國の農民問題に對する批評の如き、又だ自分の著述である共同的土地所有論の要點を書抜ていた點から見ても彼れが露國方面の著書に深い注意を拂つてゐたことが證明せらるゝのである。

Marx は長日月を大英博物館の圖書館場裡に bluebook を見て費した結果、彼れは自己の健康の大半を失ふに至つたのである、彼れは當時資本論の第二、第三の部分に筆を入れてゐたが、彼れは「國民經濟學說批判史」を以て全體をひき纏めんとする考を抱いてゐたのであるが、然し此考は不幸實現せられなかつたのである、彼れは殆んど終日を自己の著作に費したので

あるが時に一二時間を寄書家として關係を有してゐた New Yorker Tribune に捧げたことがある、而して其他の時間は多く家にあつて、其著作の増補、訂正等に費したのである、彼れの書庫は三つの窓を有した室で、之れが内部は悉く彼れの參考書で、其大半は如何にも亂雜に「テーブル」や椅子の上に置かれてゐたのである、自分は屢々彼の仕事中に訪問したことがあつたが、かゝる際には他の問題は一切口に上らぬ程、彼れは著作其者に没頭してゐたのである、又、日曜日には彼れは家族と公園を散歩するのを常としたが、但、かゝる際にも屢々自分の問題のみを考へた結果、總て附近の光景等に毫も注意を拂はぬことが多かつたのである、だが、彼れは一面政治論に非常な興味を有し、時に長時間を各國の新聞に費したことがあるのである、彼れが倫敦を離れたのは自分の記憶する處では、只だ一回の Paris に行で當時、彼れは、自己の旅行

上必要な時間のみ獨逸を通過するを許された分のである、又、巴里方面に對しては Guizot 内閣以來彼れは入國を禁ぜられてゐたのである。

自分が Square Crescent を訪ふた際は、資本論の著者はかなり平和な生活を送つてゐた、そして彼れは時に數週間或は數ヶ月を経済史的研究殊に土地所有權發達史に費したことがある、勿論此研究は彼れが目的とした研究には間接の關係を有したに過ぎなかつたのである。彼れは亦た數學の研究に没頭したとがある、殊に當時、盛んならんとした經濟學の數學的傾向に迎合せんが爲めに微分及積分を研究したのである、又彼れが經濟學殊に英國の經濟書に對する造詣は非常なもので多讀の點では Roscher 教授に匹敵し得たのである、其結果 Marx によつて眞價値を發揮した經濟學者も少くない現に Petty の如き Godwin の如きは其一人である、實際に於て Marx は高等な教育を受けた紳士で、彼れが詩

人 Engels と親交を結んでゐたことは時に彼れをして多少談話の間に諧謔を交しむるの能を有せしむるに至つたのである。

彼れの夫人であつた Jenny Westphalen の祖先は蘇格蘭の名家で Herzogen von Argyll と親戚の關係を有してゐる之れに就いては Marx 自から物語つた一笑話がある、彼れが巴里で放浪生活を送つてゐた際に金に窮して妻君が結婚の際に齎らした銀製の道具を質に入れたことがある然るに道具には Argyll の紋章があつたので嫌疑が彼の身にかゝつて一日を牢獄に送つたことがある、而して彼女は Marx の幼馴染で、四歳年上であつたが然かし健かな、快活な美人であつた、そして此幼馴染が自分の愛人となつたのは、彼れが中學在學中であつた、其後大學に入學する際に、彼れは密かに彼女と將來を約したのである、殊に兩人の將來を幸福ならしむるに都合よかつたことは Westphalen の老主人

が Saint-Simon の熱心な崇拜家であつたことである、斯くて Marx と彼女とは圓滿な家庭を結ぶることになつて、老境に入つても彼れは新年を迎ふる毎に夫人とよく舞踏をしたのである。彼れは獨逸の社會主義者中では主として Bebel を重んじてゐた、それと反對に Liebknecht に就いては一再ならず失望の意を洩らしてゐたのである。

自分は其後 Moskau 大學教授に任命せられたので暫らく彼れと遠ざかつたが、其翌年の夏に自分は倫敦にゆく機會を得て茲に再び彼れに近くを得たのである、當時自分は専ら歐洲の經濟的發展に就いて研究してゐたが、其間に絶えず批評の勞をとつて呉れたのは彼れ Marx であつた、自分が佛國の制度に關する大著を公にするのを躊躇したるも實は彼の與えた批評が餘り香ばしくない結果であつた、自分が伊太利、西班牙及米國に滞在した際は彼れが最後の年であつ

た、自分は歐洲に歸ると共に二個の恨事を耳にした、即ち一は Marx 夫人の死と他は彼れの長女の此世を去つたことである、自分は同時に彼れが病の爲めに冬期を London に過すことを傳聞した、既に自分が彼れに遭つた際には彼れは胸の痛みを訴えた、然し其肉體の頑強な點から家人は神經衰弱の結果と見倣してゐた、だが彼れの over-work は確かに彼の健康を破壊したのである、彼れが南方で暮した冬は雨多く、彼れは寒胃に罷つて再び倫敦に歸つた。

Marx 夫人の逝つたのは千八百八十一年で、それから一年を経て彼れの長女即ち Longe 夫人が此世を去つたのである Marx は此晩年の精神的創傷を忘れんが爲めに益々書に親んだ、然し其結果は益々彼の健康を悪くした、彼れは千八百八十三年三月十四日自分の愛する「テーブル」によつて此世を去つた Engels の記した中に「多分、醫術で彼れの命は尙ほ二三年を惹止めるこ

とは出来たかも知れぬが、然し斯くの如き存在は Marx の堪ゆる處でなかつたと思ふ、自分の事業を完成することが出来ぬことの意識を以て生活することは何等特別の苦痛なくして永劫の浪に葬らるゝに比すれば此上もなく苦痛である。(完)

恐慌と利子歩合(下)

高城仙次郎

第三節 恐慌と利子歩合との關係

前述の如く、恐慌は貸借が極度に膨脹せる際に發生する現象なるを以て、貸借を左右する利子歩合の高低が恐慌と密接の關係を有す可きは明かなり。恐慌と金利との間に存する此關係は夙に學者の認めたる所にて、マーシャル教授も之に就きて論じて曰く(註一)

『後段に於て商業が交互に膨脹期と沈靜期とを有する原因を論述するに至らば、此商業の伸縮が貨幣の購買力に生ずる變動に依りて誘致せらるゝ實質上の利子歩合の高低と密接の關係を有するものなることを明かにするを得可し。』と

マーシャル氏は特に恐慌と利子歩合との關係のみに就きて論議するものに非ずと雖も、商業取引の伸縮に及ぼす利子歩合の影響を云々せるに徴して、實業界の好景氣が變じて不振と爲る過渡期に發生する恐慌と利子歩合との關係を考慮せしは明かなり。而かも、マ教授は利子歩合と恐慌との間に存する密接なる關係を以て物價の騰貴又は低落に基づく現象なりと思惟せるが如し。如何となれば、氏は言を繼ぎて、其關係の原因に就きて左の如く簡單なる説明を加へたればなり。(註二)

『物價が將さに騰貴せんとするの形勢を示さんか、人は競ふて資金を借り、之を以て貨物を購入し爲めに物價騰貴の趨勢を助長するに至り、商業盛んと爲り、輕卒無謀の取引行はるゝものなるが、借入資金を以て事業を營める者は其債務を決済するに當りて實際に借用せるよりも少額の購買力を返附するが故に、債

權者の損失に依りて利益を受くることゝなるなり。然りと雖も、懸て財界の信認地に墜ちて物價が低落し始むるに至るや、人は皆な貨物を賣却して價值の急激に昂騰しつゝある貨幣を手せんと欲する結果として、物價は益々激落し、信用は又夫れが爲め愈々收縮するに至るを以て、物價は既に下落せるが故に更に下落するの傾向を長期間に亘りて持續するものなり。』と

即ち、マーシャル教授の説に據れば、物價騰貴して貨幣の購買力減少せば、債務者は不豫期の利益を享け、物價低落せば、其の反對の現象を生ずるに至るなり。例へば、甲が乙より金子百圓を年利五分の契約を以て一ヶ年間借り入れたりとせんか、返済期に於て甲は乙に金百五圓を支拂ふを要するものなるが、假りに其一年間に物價が一割騰貴せりとせば、甲が乙に支拂ふ金百五圓は借入契約當時に於ける金九十五圓四